

人が最期に望むのは、 ハートのある人が寄り添って 安心して看取ってくれる場所

紅が赤い花をつけていた。

「和が家」の入所条件は？

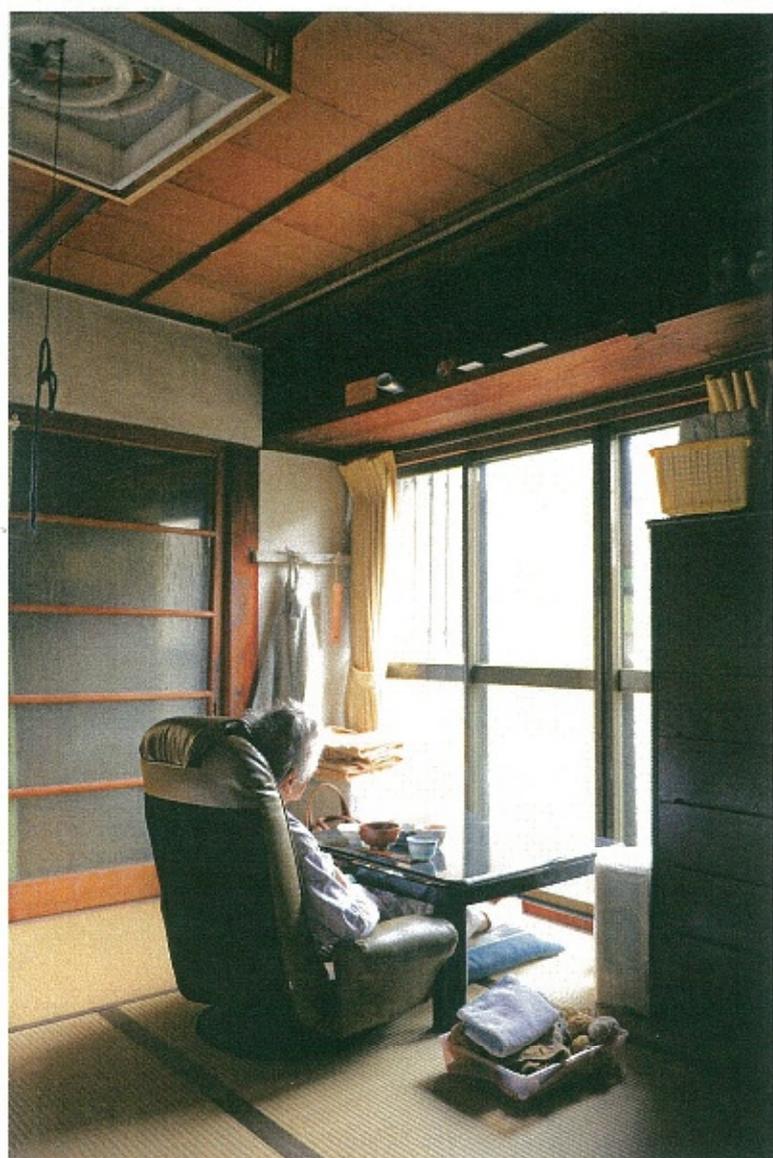
「何もないです。ご本人とご家族が入所を希望される場合にスタッフが事前面談し、部屋に空きがあれば、どなたでもお引き受けしています」
ちなみにひと月の利用者負担額

1階奥、神園のある座敷で暮らすKさんは101歳。入所当初は編み物と手芸が得意なお年寄りだった。腰を熱めながらマイペースで食事をとる

は、ホテルコスト(家賃・光熱費・食費を含めた居住費)10万円プラス紙おひつ代、往診・訪問看護代(患者1〜3割負担)などで、大体、12万〜13万円程度だ。
特筆すべきは、「和が家ケア」の中身である。

- ① 3交代制で24時間介護が提供される
- ② 夜間も利用者9人に対してヘルパー2人が常駐
- ③ 家族は希望すれば一緒に泊まれる
- ④ 市街にあつて交通の便が良く、家族や隣人・友人が立ち寄りやすい
- ⑤ 個室だが、孤独にならないよう配慮して、入居者は一日の大部分を1階居間で共に過ごす
- ⑥ 医療は訪問診療、訪問看護で行われる

・梅千し
食膳を並べ終わると、1階奥の間に足を運び、生方さんが前出の94歳女性に声をかけた。
「ユリコさん、お昼になるけど(キッテン)に行ってみない？」
「お昼……？」と、閉じていた目を見開き、ユリコさんが訊く。
「お昼の時間ですよ」
「もう、そんなになるの……」
「起きられる？ 起きてみて食べてみない？ 美味しいのができたよ」
「はい、ありがとう」
軽い認知症。足も弱ったユリコさんは一人でうまく起き上がれない。「ゆっくりでいいよ」と語りかけ、生方さんは両手で抱き起こすようにした。
「さあ、ドッコイシヨ。声だけ助けるね、ドッコイシヨって(笑)」
「はい、ありがとう」
足をすくし曲げて、ユリコさんは布団の上でゆっくり起き上がり始めた。
「じゃ、後ろから支えるからね。はい、起きるよ、一、二の三」
うまく立ち上がったユリコさんが「はい、ありがとう」ともう一度いった。実の娘と老母を想わせるほど息が合った、その情景に「家族の絆」さえ感じられた。



ここで誰もが信頼するヘルパーさんに身心をまかせ、のびのびとして食べ、昼寝をし、入浴することができる。体調を崩しても、電話一本で医師やナースが駆け付けに来てくれるのだ。
お年寄りにとって大事なのは、食べること。噛む力が弱った人にはゼリーやアイスクリームのほか、ヘルパーたちが家族目線で見た目も美しく、食後の食の献立は、次の通り。
・ごはん
・玉子とみょうがのスープ
・マーボナス(ナスは皮の短で収穫)
・マカロニサラダ

20歳で母親(当時52歳)に死別した生方さんにとって、ユリコさんは、